

どこか聞き覚えのある懐かしい言語に思わず足が止まった。

京都に入り営業の次の訪問先に向かう途中、雑踏にもまれながら鴨川に架かる三条大橋を渡っていたら、ロー・ディオ（ちよっと待って）という声が聞こえた。

タイ人がいる。

振り向くと浅黒いにきび面の若者がカメラを構え、アングル合わせに手間取っていた。

タイ語は声の上がり下がりの声調パターンが五つもある複雑で奥行きのある言語だ。三パターンの日本語が母国語の私にとっては非常に手ごわい外国語だったが、タイに住んでいたとき見ていたテレビの女性ニュースキャスターが話すタイ語は、まるやかで美しく耳に心地よかった。

レンズが向けられた方には、若い女たちが三人、肩を寄せあつてポーズをとっているが、今冬一番の冷えこみだという京都は昼下がりも寒さが堪えた。振り上げば市内を取り囲む山々は雪を被り空は重い雲が垂れこめている。女たちは寒いわよ、早くして、と口を尖がらせている。学生か、親の仕事で日本に暮らす子女か、着ているものや身ごなしは都会っ子の雰囲気だ。

「カーツプ、カーツプ、イーム・ノイ（はい、はい、さあ、笑って）」

やっこのことで撮影が済むと、女たちは大袈裟にため息をつき、思い出したかのように欄干から身を乗り出し水鳥が舞う川面を指差している。男の方は困ったようにデジカメを指先にぶら下げ辺りをきよろきよろ見回した。

視線を向けると、彼のくりつとした目とぶつかかった。顔は四角くいかついが瞳はあどけない。分厚いダウンジャケットのジッパーを寒そうに引き上げながら、英語で、すみませんかと、カメラを掲げた。

「マイ・ペン・ライ（かまいませんよ）」

と私は歩み出た。

「タイ語がお出来になるんですか」

彼の目許に驚きと喜びが混じった人なつっこい色が浮かんだ。

少しですがね、と応じると彼は先を歩きだした女たちに、もう一回並んでくれと拝み倒している。

タイ語をしゃべったのって何年振りだろう。自分の中ではとうに錆びついたはずのタイ語はテレビで聞くことはあっても話すことはない他国の言葉だと思っていたが、「マイ・ペン・ライ」のありきたりのフレーズが、咄嗟に出たのに内心苦笑いしてしまった。

気にするな、問題ないよ、という意味でもあるこの言葉は私にとって伝家の宝刀で、厄介な場面に出くわすと「マイ・ペン・ライ」と幾度も危うく切り抜けたのだ。

ニコンのデジカメを渡されてファインダーをのぞくと、雪の比叡山をバックにあか抜けた感じの顔だちが収まっていた。女たちの前でへいこらしている彼も着こなしは洗練されたものがあり育ちのよさを窺わせた。女は三人とも鼻筋の通った色白美人で中華系の血筋を引いているのかも知れなかった。

タイ語をしゃべってドキドキしている。綿のワークシャツにジーンズ、サンダル履きという姿で高温多湿の彼の国で過ごした二十代最後の数年が懐かしい。

二十数年前、私はカンボジア難民救援のNGOの駐在員としてタイで暮らしていた。バンコクの駐在事務所を拠点にタイ・カンボジアの国境線上に点在していたカンボジア難民キャンプに救援物資を届ける活動をしていた。

内戦が終わらぬ不安、戦闘による負傷と死への恐れ、自由への渴望、未来への焦燥。そういうったカンボジアの難民たちが抱いていた感情にどれほど心を寄せられたか判らない。国を庄政下に貶め自国民を虐殺したポルポト政権の時代を生き延び、さらにまた十年以上も難民暮らしを強いられた人々の苦悩に少しでも手を差しのべられたらどうか。最終的には外国人であり第三者でしか過ぎなかった私は、単純に救援物資の運び屋で終わらざるを得なかった。それでも外国人がキャンプを訪れ、私たちが提供していた織物や洋服といった職業訓練プログラムを、彼らが国に帰る時まで続けることによって、もしかすると諦観が希望に変わる手助けになるのではとキャンプに通った。

真っ青な空に高く聳える巨大な積乱雲。灼けるような強い陽射し。鉄分を多分に含んだ紅色の大地。そうした天地に挟まれてニッパ椰子の難民小屋が密集していた。食糧配給を受けて頭に米袋を乗せた女や子供の行き交う人波が、赤茶けた砂埃を巻き上げる。職業訓練の機織りに取り組む女たちの首筋や襟元に流れる汗が、竹を編んだ明り取りの窓から差し込む陽光に光る。裸足で走り回る子供、鎮痛剤面持ちで横たわる地雷負傷者。難民キャンプの光景が千切れ雲のように浮かんでは消える。

イーム・ノイ。シャッターを押しながら私は亜熱帯の地で暮らした記憶をまさぐっていた。

「コップ・クン・カップ（ありがとうございます）」

若者は口元に笑みを湛えて、タイ語はどちらでと私に尋ねた。

カンボジア難民救援でタイに暮らしていたことを話した。

「そういえばそんなことがありましたねえ」

「あまりご存じないんですか」

私、二十五歳なもので、まだこんなのでしたと、彼は幼児の背の高さあたりで片手を広げた。二十年前といえれば彼はまだ五歳になったかならないかの時分だ。はつきり覚えていなくとも不思議ではない。

彼はアパレル商社を営む父親の会社に勤めており、今回は父の日本への出張に随行し休暇のこの日、姉や妹といっしょに京都見物に来たのだという。

「キャンプはアランヤプラテートの近くにありました。アランヤの街に行ったことはありませんか」

いや、ないですね、と悪びれることもなかった。

アランヤプラテートはバンコクから東へ二百五十キロ足らず、カンボジア国境までわずか十キロの田舎街だった。街は一九七九年にベトナム軍の侵攻によってタイ領内にカンボジア人が難民として溢れ出て以来、十数年間救援活動の拠点だった。国連や各国のNGOの駐在事務所が置かれ、救援物資の集積地となり難民景気にわいた。難民小屋建材の竹やヤシの葉を満載したトラックや、米や缶詰などの食糧を山積みしたトレーラーが始終往來していた。私もその定宿から各地のキャンプを訪れたのだ。

「ビジネスに関係ありませんから。カンボジアのプノンペンにはよく行きますよ。今度工場をひとつつくります。父がカンボジアとの商いを重視したいと言ってますし、ぼくもそうすべきだと思います。あそこは労働力も安いですしこれからの国ですよ」

と彼は微笑んだ。

「そうですか。インドシナも平和になりましたものね」

私は他に言いたいことがあったが、すぐに言葉にならず、まごまごしているうちに、早く行きましようよ、と彼の姉妹たちがせかさす声がし、それ以上何か言う気を失った。

彼は姉妹らに、私が難民救援をしていたらしいんだ、みたいなことを伝えた。

彼女らはへえーっ、と揃って目を丸くした。

最大で三十万ものカンボジア難民が住んでいた数万のニッパ椰子の難民小屋は、カンボジア和平が成立した一九九三年以降、彼らがすべて国へ帰ってしまうと、最初にその敷地

造成のために森林を切り開いたときと同じように、各地のキャンプには大型重機が投入され、ブルドーザーに小屋はなぎたおされ踏み潰されやがて整地されていった。難民キャンプは日が傾いて消える陽炎のように地上から人知れず姿を消した。

互いにチヨク・ディー・ナ（幸運を祈ります）と言い交して別れたあと、タイ人の旅の若者たちの後ろ姿を目で追いながら、戦後というものは、ものごとの概念のひとつに過ぎないのではないかと反芻していた。

戦争やその結果としての難民の発生は史実であっても、その事実そのものに直面した人を除けば、それは脳裏を彷徨う記憶ではなくデータとして残る記録に過ぎない。戦後を記憶者として生きる人と記録の読者として生きる人の間には当然、不条理な隔たりが生まれる。記憶と記録の間に感情の違いが挟み込まれるからだ。現場で苦しみや悩みを抱えた人とあとでそれを知った人。たぶん二人が同じ感情をもつことなどありえないだろう。

ただ私の場合は低劣で、自分が国境地帯で残したはずの足跡を、あのタイの若者が全く関心をもたなかったことに対し若干の嫌悪感を抱いたからだ。大したこともしなかったくせに、そんなにも自分が可愛いのかと半ば呆れながら、私は橋の向こう側まで歩き始めた。